

大津絵の魅力をフランスへ

クリストフ・マルケ

歌舞伎に関心のある方は、近松の名作「傾城反魂香」や舞踊「藤娘」と深い関係がある大津絵のことはよくご存知であろう。二月に国立劇場の伝統芸能サロンで「忘れられた民画・大津絵―江戸の笑いとおロケイ」について、多くの熱心な聴衆の方々に恵まれながらその魅力を語る機会を頂いた。

私は今から二十五年前に日本美術史を研究する目的で東大に留学し、初めて大津絵のことを知り、すっかり魅了された。当時は博士論文のために明治の代表的な洋画家・浅井忠の晩年の画業を調べていたが、江戸時代の美術との繋がりが意外にも多いことに気づいた。

浅井は、一九〇〇年のパリ万博を見学した後、京都で大津絵を再発見し、その素材でユーモラスなデザインを近代工芸に生かすユニークな試みをした。一昨年、京都の骨董屋で私が見つけた浅井のデザインによる大津絵図柄の陶器皿がその例で、NHK「日曜美術館」の特集「近代デザインの開拓者 浅井忠」で、それらの作品における和とモダンの融合の魅力について語った。

面白いことに、明治末期に、ある画家がフランスから帰った後に大津絵は「まるでロダンだ」と述べた記録もある。つまり、デフォーメやブリミティヴィズムが特徴である西洋の近代美術との出会いが大津絵を再発見するきっかけになったのである。戦後では、たとえば前衛画家の岡本太郎が大津絵を賞賛したのも同じ理由であろう。

この秋に、パリで大津絵についての著書を出版することとなった。フランスでは十九世紀のジャポニスム運動によって浮世絵は今でも大変人気があるが、同時代の大津絵はほとんど知られていない。百年前に浅井忠が「フランス人に大津絵を紹介してやったら非常に

受けるだろう」と自信を持って述べた言葉を、ようやく実現することができる。

大津絵に関心をもった唯一のフランス人がある。先史学者として有名なアンドレ・ルロワ・グーランである。戦前に日本の民間信仰を調べるために来日し、絵馬や大津絵を集めた。今回の著書は彼が注目した篆刻家の楠瀬日年の臨写による大津絵版画集(大正九年刊)を復刻するもので、約八十点にのぼる画題を解説しながら、大津絵の歴史を紹介する本になる。

北斎の絵本がマンガの起源と言われているが、マンガ的な図像の描写としては、滑稽な民画の大津絵が元祖と言って差し支えないだろう。大津絵は、江戸から明治にかけて庶民に親しまれ続けただけに今でもその魅力は色褪せない。今後はマンガのファンが多いフランスにもその面白さを広く伝えたいと思っている。



(クリストフ・マルケ)

1965年、フランス生まれ。西洋美術史や日本文学を勉強した後、東京大学に留学。近世・近代日本美術史と出版文化史を専攻、浅井忠の研究で博士号取得。フランス国立東洋言語文化研究院教授。現在、日仏会館フランス事務所所長。江戸の画譜を多数仏訳し復刻。2014年に、フランスで初の大津絵についての著書を出版。